



発掘調査報告書

おお ろ かわ むかい  
大呂・川向古墳群

しら いし ざこ  
白石迫古墳

1993年9月

島根県

横田町教育委員会

## 卷頭によせて

横田町教育委員会

教育長 浅野俊夫

「出雲風土記」に所載されている横田郷の正倉所在地は、横田盆地東部の代山地区と比定されています。

この度、報告書としてまとめました『大呂・川向古墳群』は、その代山地区集落を見下ろす尾根端に所在し、昭和61年11月に国営農地造成工事中に古墳の石棺の一部が発見され、その後の調査によって古墳10基からなる古墳群であることが判明し、主要部分の調査をおこなうとともに、古墳が分布する一帯を工事から除外し現状保存しました。

先に述べましたように、この古墳群の所在する代山地区は、横田郷の中心部と推定されているところであり、その集落発展の過程を知るうえでも、また、地域の歴史を解明する上でも重要な遺跡と思われます。

それに先だつ昭和52年6月に調査を行いました「白石迫古墳」は、国営農地造成工事の計画地に所在し、地権者の強い要望からやむなく工事を行うこととなり、記録保存のための発掘調査を行いました。この調査には、町内各小中学校の教員の皆さんや、横田史談会々員の有志の皆さんのご協力をいただきました。

白石迫古墳は、その墳丘を貼石でかざっていることや、墳丘盛土の崩壊防止のための外護列石が設けられている古墳としては県内においてはいまだ知られていないこと、また鉄製品や鉄滓も出土し、地域での製鉄が想定されるなど貴重な資料を得ることができました。

本報告書は、『大呂・川向古墳群』と『白石迫古墳』の2つの調査報告書として作成しました。本報告書の作成までに十数年を要したこと深くお詫び申し上げるとともに、発掘調査から本書の作成にいたるまで御協力、御指導いただいた関係の皆様方に対し謝意を表し、卷頭のことばとします。

## 例　　言

1. 本書は横田町教育委員会が、昭和61年度及び昭和52年度に実施した国営農地開拓事業地内に所在した大呂・川向古墳群及び白石追古墳の緊急発掘調査報告書である。
2. それぞれの調査体制は次のようである。(役職名は当時)  
大呂・川向古墳群　島根県仁多郡横田町大字大呂字川向1828-1  
調査主体　横田町教育委員会 教育長 児玉哲郎　事務局 尾方 豊  
調査担当　島根県文化財保護指導委員 杉原清一  
調査期間　昭和61年11月29日～12月6日  
白石追古墳　島根県仁多郡横田町大字船原字白石追1948番地  
調査主体　横田町教育委員会 教育長 糸原正徳　事務局 三成輝夫  
調査担当　島根県埋蔵文化財調査員 杉原清一  
調査期間　昭和52年6月1日～6月6日
3. 本書は各編とも執筆は杉原清一が、挿図の浄書は藤原友子が行った。
4. 出土人骨の鑑定は鳥取大学医学部法医学教室井上亮孝助教授に、人骨付着物の検討は平安博物館上田健夫氏にそれぞれ依頼し、その成果は本書に収録した。
5. 本書の刊行は横田町教育委員会尾崎幹夫が企画・統括し、杉原及び藤原が編集した。



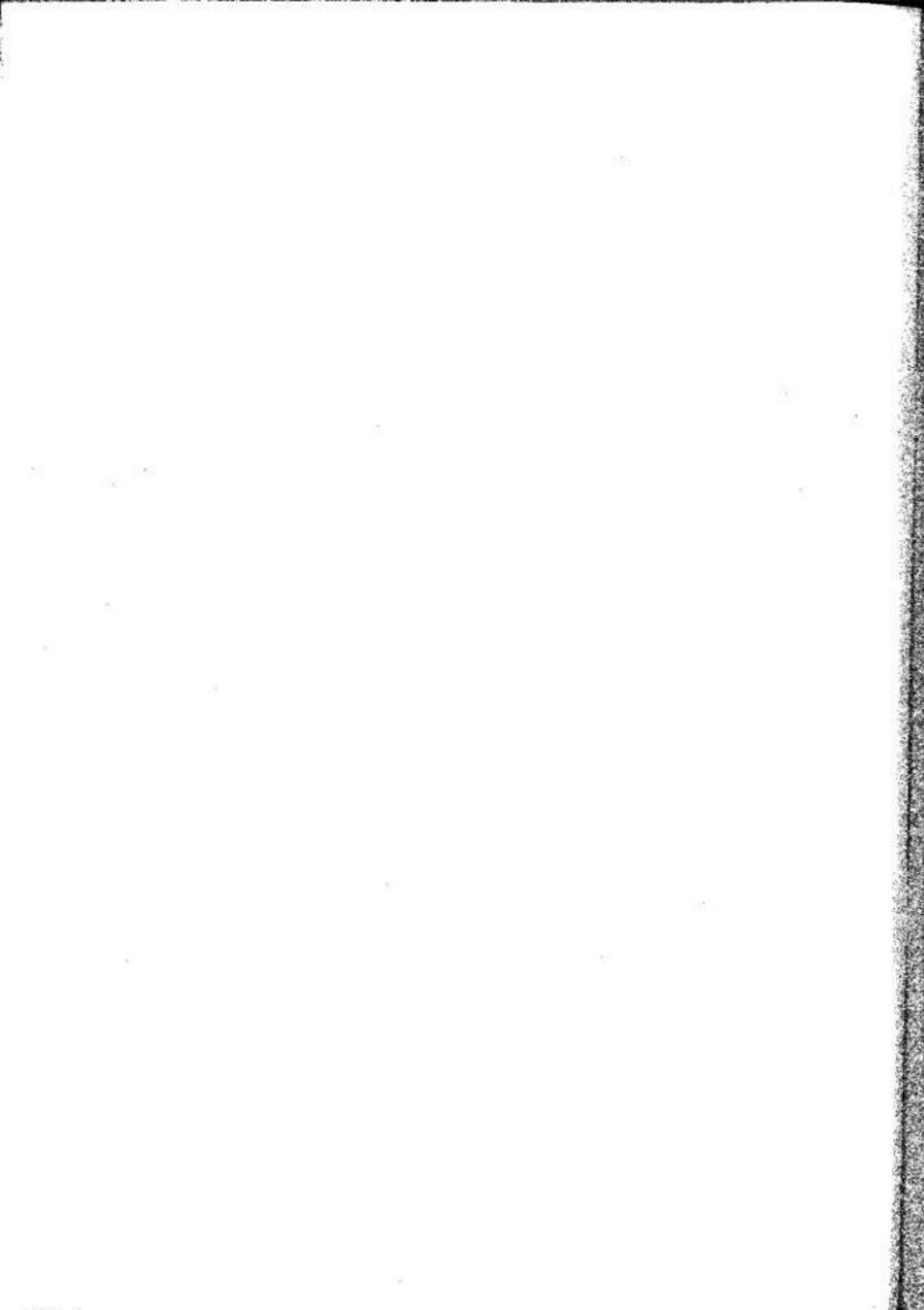
## 目 次

卷頭によせて

教育長 浅野俊夫

例言

大呂・川向古墳群の調査	1			
1. はじめに	1			
2. 遺跡の立地と環境	1			
3. 造構と遺物	5			
1号墳の主体と墳丘	1号墳出土遺物	2号墳	3号墳	4号墳
5号墳	6・11号墳	7・8号墳	9・10号墳	その他
4. まとめ	11			
付1. 大呂・川向1号墳人骨付着物の顔料検証	上田健夫	13		
付2. 大呂・川向1号墳の出土人骨について	井上晃孝	16		
図版				
白石追古墳の調査	23			
1. はじめに	23			
2. 古墳の立地と環境	23			
3. 造構	24			
墳丘について	石室について			
4. 遺物	28			
直刀残欠	袋状鉄器	棒状鉄器	鉄滓	須恵器片
5. まとめ	29			
図版				



# 大呂・川向古墳群

## 大呂・川向古墳群

### 調査の概要

遺跡名：大呂・川向古墳群

遺跡の所在地：島根県仁多郡横田町大字大呂字川向1828-1番地（山林）

調査主体者：横田町教育委員会 教育長 児玉哲郎 事務局 尾方 豊

調査担当者：島根県文化財保護指導委員 杉原清一

調査補助員：（三刀屋町） 藤原友子

出土人骨鑑定：鳥取大学医学部法医学教室 井上晃孝

人骨付着物検証：平安博物館 上田健夫

調査期間：昭和61年11月29日～12月6日

調査指導：島根県教育厅文化課

### 1. はじめに

昭和61年11月1日仁多郡横田町大字大呂字川向において、国営農地造成工事中、重機によって古墳の石棺の一部を掘り起したことにより本古墳群発見の端緒となった。

通報を受けた横田町教育委員会は直ちに工事中止を指示し、付近を含む地帯の踏査を行い古墳10～11基が存在していたことを確認し、そのうち約半数が破損を受けていることが判った。

協議の結果、この古墳が分布する一帯を工事から除外し、現況保存することとし、その資料とするため緊急試掘調査を行った。調査は、昭和61年11月8日の踏査所見に基づき、11月29日から12月6日まで行い、1号墳の主体部と1～5号墳のトレンチ調査及び7号墳の主体部確認を主とし、併せて主要部分の現況測量を行った。

### 2. 遺跡の立地と環境

この古墳群は、横田盆地東部の代山地区集落を見下ろす位置で、斐伊川に削られた南側崖上の尾根端に所在する。斐伊川からの比高は約18mで標高374mである。

この横田盆地は古くからの遺跡が数多く知られており、盆地を見下ろす丘陵上や県境近い山地では縄文時代早期の遺跡が知られ、また横田盆地を囲む丘陵端やその麓部には弥生中期以降の遺跡がやや密に分布する。

『出雲國風土記』(733年)に所載の横田郷はこのあたりで、正倉所在地はこの代山地区に比定されている。



図1. 大昌・川向古墳群地形図

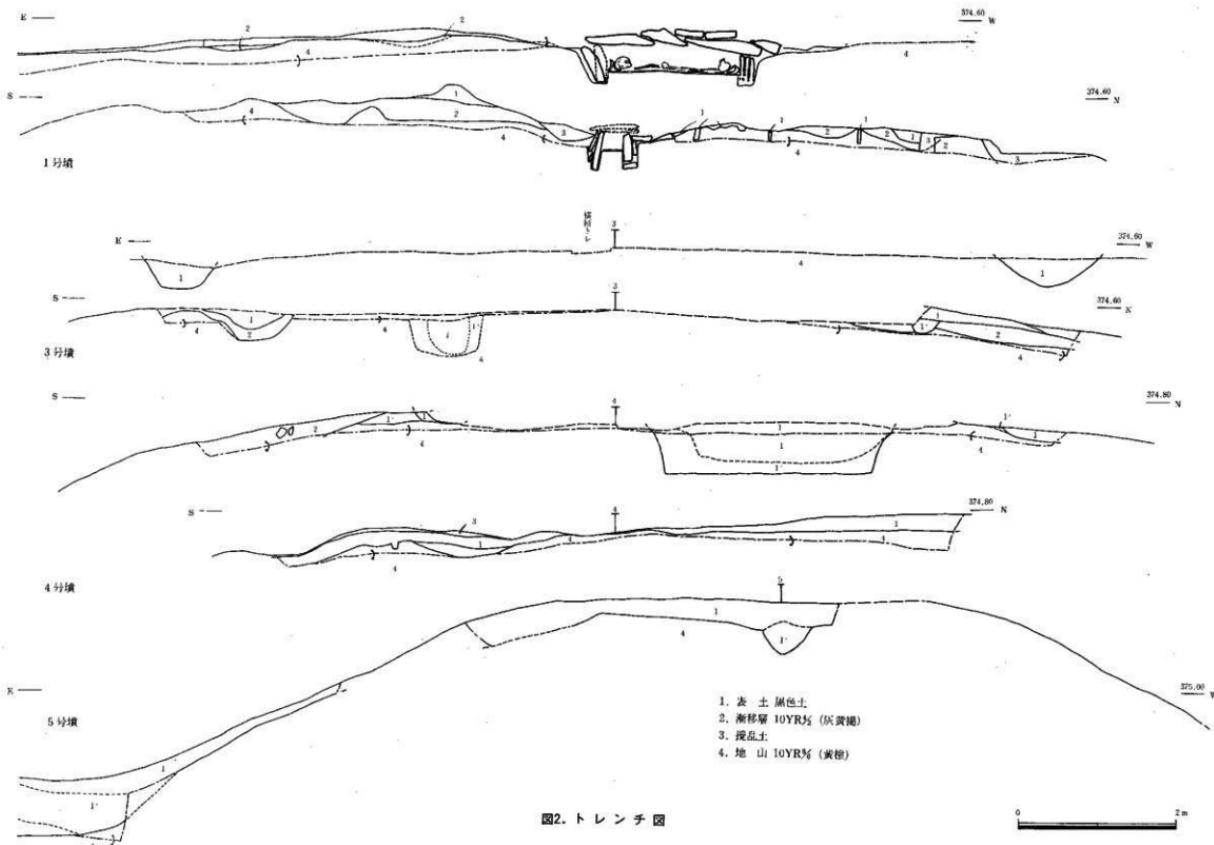


図2. トレンチ図

代山地区についてみると、北側では丘陵突端部にはそれぞれ古墳が数多く知られ、東側では多久野塚古墳群が知られている。大呂・川向古墳群はこの多久野塚古墳群からは連続する地形で西1kmにあたり、代山の集落からは南方に斐伊川をへだてて仰ぎ見るところである。

### 3. 遺構と遺物

発見時の踏査で、フラットな尾根上にほぼ南から北へ連続する1号～4号墳があったとみられ、その北端近く深く掘り割りで区画された大型の5号墳があり、さらに北へ丘陵を下る位置に6号・11号墳が認められていた。またこれとは別に東約90m及び120mの丘端にはそれぞれ7号・8号墳と9号・10号墳が存在することも判った。

今次の調査は、工事によって地表が搅乱された1号～4号墳を主対象とし、5号墳、7号墳についてはその主体部の状況を確認することとした。

#### 1) 1号墳の主体部と埴丘

直径7.6mの円墳で、埴丘のほとんどが削り取られており、主体部は中心に當まれた箱式石棺1基であったが、その蓋石も半分が重機によって動かされ、側方に放置されていた。

箱式石棺は、尾根方向のプランで表土（黒色土）から地山（黄色粘質土）に達する2.5×1.8m長方形の堀り方に設けられたもので、近くに産出するカンラン石玄武岩（当地方の俗

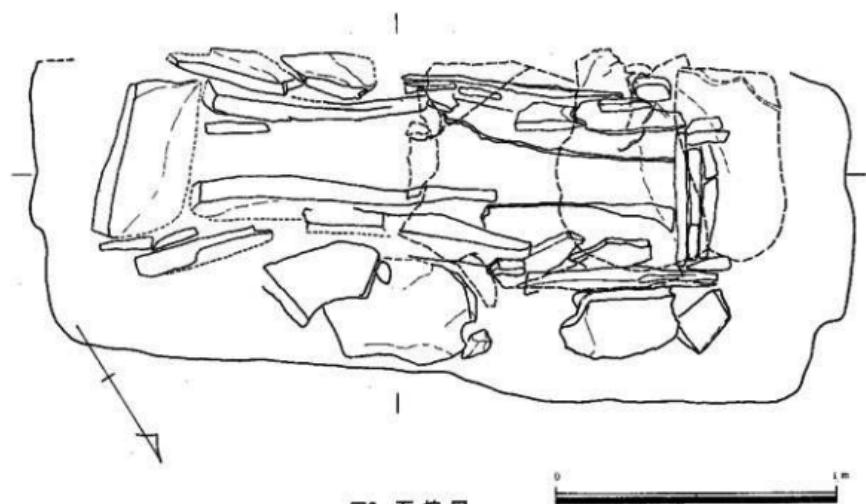


図3. 石棺図

称チャンガラ石)の板状石を用いて、側壁は二重に立て囲み北西側の小口のみは三重にしている。

箱式石棺の床面には敷石ではなく、堀り方地山の上に川砂を厚さ2~3cm敷いて屍床としている。

蓋石は7枚で、両側の足端方向から鏡伏状に敷き並べてあり、さらにその上にも部分的に二重に被われていたものと思われる。現状では3枚の蓋石のみが元位置に保たれていたが、その他は工事によって割れたり、傍へ放り出されていた。

なお、蓋石、側臥石とともに粘土で目貼りしてあったが、壁部と蓋部とでは用いられている粘土が若干異った土質であった。

側壁は工事作業によって両長側ともに内側へ強く傾斜し、床面を圧迫していた。

石棺北東側壁の外側に接して表面の平坦な花崗岩が4枚敷き並んでいた。この敷石の用途は不明であるが、葬送儀礼に関わる台座かとも思われた。

棺内は、敷砂の上に東南側を頭位にした人骨2体が残存した。左側(Ⅰ号人骨)は伸展仰臥していて2次的な移動はほとんど認められなかった。右側(Ⅱ号人骨)はほぼ上半身部分の骨が集骨され、頭骨はⅠ号人骨の頭骨に並べていた。そして…部分はⅠ号人骨の上に重なるようにⅡ号人骨があった。2

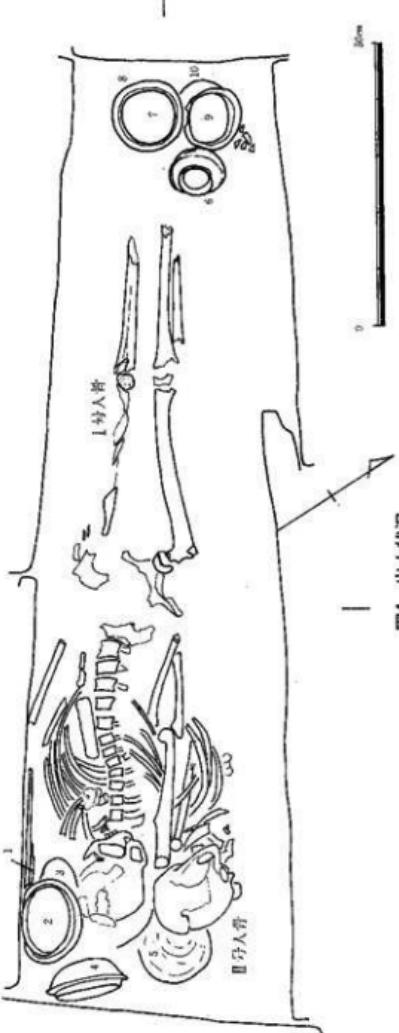


図4. 出土状況

体の人骨は比較的保存状態が良く、細部に至るまで残存していた。また頭骨は体部に比較して赤褐色が濃く、Ⅱ号人骨の場合はそれほどではなかった。この赤褐色付着物は開館数日後には退色が著しかった。

2体の人骨については鳥取大学医学部法医学教室・井上晃孝氏に依頼して取り上げ、鑑定していただいた。その結果概ね次のようであった。(16頁参照)

Ⅰ号人骨 女性 20歳代後半 身長146~151cm 血液型O型 2次移動なし

Ⅱ号人骨 女性 壮~熟年 144cm位 血液型O型 集骨、下半身部を欠く

またⅠ号人頭骨付着の赤褐色物質について顔料か否かの検証は、申し出によって平安博物館・上田健大氏によって行われた。その結果は顔料とは考えられないもので有機物質であると判定された。(13頁参照)

墳丘はそのほとんどが表土剥ぎ工事によって失われており、トレンチによってわずかに落ち込む周溝の底部を認めた。この周溝は幅0.6~0.8mで、これによって1号墳は直径7.6mの円墳であったことが判明した。

## 2) 1号墳出土遺物

遺物はトレンチ等では認められなく、すべて石棺内に副葬されていたものである。足先の位置に須恵器の蓋環2組(山陰編年のⅡ期相当)と小型壺があり、2体の頭骨下から小口壁の下に半ば敷かれて枕として使用されていた須恵器の蓋環2組(山陰編のⅢ期相当)と、Ⅰ号人骨の左上腕骨上に全長21.0cmの刀子1口があった。

**刀子**: 残存全長21.0cm、刃長12.5cm、刃幅1.65cm平造り、木柄は断面長円形で木質部がよく残っている。柄元2.6cmの位置に幅約1%の鋒が一周しており金属線状のものが巻きつ

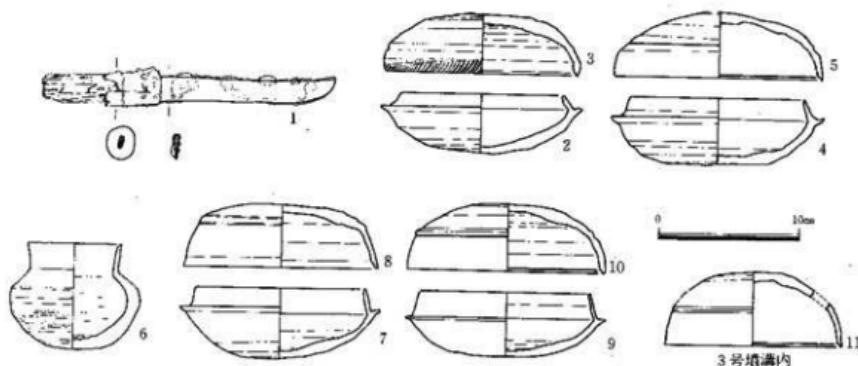


図5. 遺物図(1)

けてあったと思われる。また地面上に接していた側の刀身及び柄部の錆の表面に布日の圧痕が認められる。これらから、刀子は木柄で刀身は抜身のまま全体を布で包んで副葬したものとみられる。

**頭位副葬須恵器環**（2～5）：环は器径14.4cmと15.3cmで底面は削り、体側はなでている。

受部の立ち上りは内傾するやや短かいもの（2）と、より立ち上り気味でやや高いもの（4）とがある。

蓋は（2）に対応する（3）と（4）に対応する（5）とである。器径14.0cm及び15.0cmで口縁は開かない。大井部は削りで体側はなでてあり、界線は段によって棱を表している。「口唇内側には段がある。（3）の口唇外面には短かい印き目の刻線列が間隔。これらはいずれも胎土に粗砂粒を含み、やや焼成が弱く灰緑色を呈する。山陰編年のⅢ期相当。

**足位副葬須恵器**（6～10）：（6）は短かく直立する口縁の小型環で、胴部以下は回転カキ目、肩から口縁はヨコナデ調整である。内面は全面指頭で回転ナデである。体部は厚く口縁は薄い。胎土にはほとんど砂を含まず、焼成は弱く灰～灰黄色である。

蓋環は2組で（7・8）と（9・10）の組合せである。环は底部を削り体部はナデであり、受け部の立ち上りは薄く直立気味に高く、全体に薄手の造りで整形である。

蓋は天井部は削りでやや平坦であり、2条の線で削り出した後で区画された体部は直立気味でナデ仕上げとしている。口縁内側に段をつくる。これらは胎土にまれに砂粒を含み、焼成は弱く、内面は灰黄色～淡灰褐色、外側は黒褐色気味である。これらは山陰編年のⅡ期に相当する。

### 3) 2号墳

踏査の段階で2号墳としたものは全て削平されたところで、古墳が存在したか否かは判断出来ない状況であった。あるいは3分墳と1号墳との間隙部分であるのかもしれない。

### 4) 3号墳

3号墳は直交するトレンチによって直径10.0mの正円をなす周溝の底部が残存していることが判った。墳丘は全て削り去られており、主体部等も不明である。削平を行った工事関係者によると、石材等何らの異状も感じなかったとのことであり、おそらく主体部は木棺直葬であったと思われる。

また東側トレンチにおいて周溝内の落ち込み土中から須恵器環蓋片が採取された（11）。また墳丘部の削られた面に3か所黑色土の落ち込むビットが認められた。そのうち第1・第3落ち込み部についてサブトレンチを設けて観察したが、遺物は全く認められず、ビッ

トは垂直に近い掘り込みで、底面は平坦であった。このピットの性格は不明であるが、複数の主体部の一つであることも考えられる。

周溝から出土した蓋は丸味のある天井は削りで口縁はナデ、口唇内側には段があり、山陰編年のⅢ期に相当する。

#### 5) 4号墳

マウンドは完全に削り去られており、トレントに溝かと思われる落ち込みが部分的に認められたがプランは明らかでない。地形からして円墳であった可能性が高く、今後4号墳としておく。

#### 6) 5号墳

施工区域から外れており工事による損傷はない。4号墳との間を深く掘って区画しており、頂部との落差は2.7mを測る。墳丘はほぼ正円で直径16m、頂部の平坦部分は直径5mである。尾根方向にそったトレントによってみると、中心部分に幅約70cm断面U字形の落ち込みが認められる。遺物は認められなかったが主体部と思われる。なおトレントの周溝底で土師器細片が採取されたが、時期様式等は判別出来なかった。

#### 7) 6号・11号墳

5号墳から北に向って下降する尾根端部に6号墳及び11号墳が跡査によって判明した。いずれも直径6~8mの小型である。試掘は行っていないので詳細は不明である。これらはともに工事区域外に位置する。

#### 8) 7号・8号墳

1~4号墳の尾根から東へ約90mの台地端部の高まりに位置する。

7号墳は工事区域から外れていたため損傷は受けていないが、なぜかカンラン石玄武岩の板状石が1枚掘り出されていた。箱式石棺の部材と思われたので、局部的に試掘を行った。その結果箱式石棺とみられる蓋石の両端部を確認し、また別に3m離れて平行する同様の石棺があることも判った。そして掘り返された石材は第1主体の二重に重ねた蓋石の上の一部であることが判明したのでこれを元の位置に直して埋め戻した。蓋石を外しての内部調査は行っていないので棺内の状況は不詳である。墳丘の直径約10m、高さ1.5mの古墳である。

8号墳は7号墳の北側に隣接して造られた直径10mほどの円墳とみられるが、全面が削

られており、周溝も充分に把握されなかった。現況でマウンドは約1mの高さである。未掘ではあるが石材は用いられていないよう、木棺直葬の上体部であろうか。

### 9) 9号・10号墳

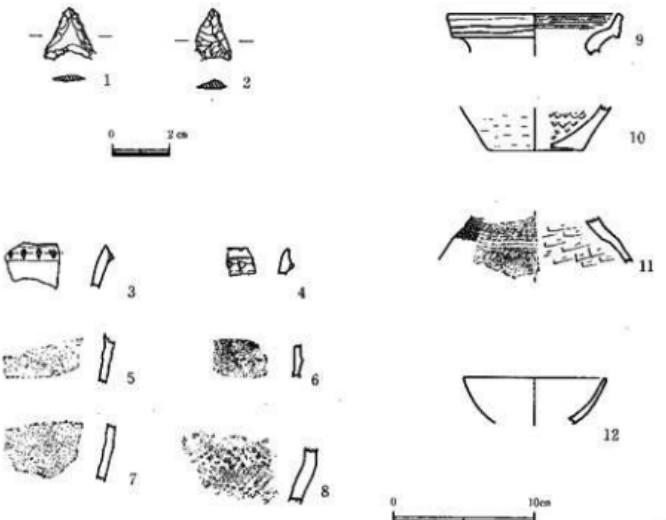
9号墳は7号墳からさらに南東約30mの丘陵台地端の高まりにあり、工事区域外のためそのまま保存されている。直径約8mの円墳とみられるが未発掘のため詳細は不明である。

9号墳に接して10号墳があるが、工事により墳丘のほとんどが削り去られ、さらにその上に盛土施工されたため、規模等詳細は不明である。わずかに9号墳に接する墳裾の一部がうかがわれるのみである。

### 10) その他

主として1号～3号墳付近の工事による擾乱土中から次のように数片の土器片等を採取した。

(1) 縄文式土器：不鮮明な縄文地で厚手の焼成のやや不良な破片で、変型土器の割片かと思われるもの(8)と、粗製無文土器のやや薄手で焼成の良い細片(5～7)である。



1・2・4～11……擾乱土中

3・5・7……1号墳Sトレンチ

12……5号墳周溝

図6. 遺物図 (2)

時期については前者は不明であるが、後者は後期～晩期であろう。刻目突帯のある細片(3・4)は變形土器の口縁部である。時期は同じく縄文晩期である。

- (2) 弥生式土器：複合口縁帶に2条の沈線をめぐらせる小形甕片(9)、平底の壺底部片(10)、櫛状工具で押し引き文帯を肩にめぐらせる變形土器片(11)は弥生中期後半以降の集落跡を想わせる遺物である。
- (3) 石器：安山岩質の石鎌2点(1・2)を石英片等とともに採取した。縄文時代後～晩期のものであろう。
- (4) その他：(12)は内外面を赤く塗った土師器の坏片で5号墳の周溝底(トレンチ)から出土した。古墳時代後～末期の上器である。5号墳頂からの転落とみられる。

#### 4.まとめ

農地造成工事中の発見によって判明したこの遺跡は、踏査で11基の古墳からなるものとみられたが、そのうち2号墳としたものは誤認の可能性もあり、10基からなる古墳群であることが判った。

工事によって発見の端緒となった1号墳を含む1号～4号墳と8号・10号墳は工事による破損を受け、5号・6号・7号・9号・11号の各古墳は工事区域の外にあったため損傷を受けていなかった。

1号墳は直径7m強の円墳で、二重に囲った箱式石棺を主体とし、女性2体を埋葬した古墳で、石棺外側には葬送儀礼を想わせる敷石がある。被葬者は2体とも女性であり、I号人に先入女性であるII号人をそえていることは通例にもどるものである。さらに血液型は同じO型であり、頭部の赤褐色の濃いことも有機物であって顔料ではないとの検証ではあるが何らかの象徴も否定しきれないなどから、やはり特異な被葬者を思わずにはいられないものである。

人骨鑑定の所見にもあるように、II号人骨の第1埋葬地点には疑義もあるが、石棺の棺壁と蓋石の目貼り粘土の土質が異なることは追葬によるとみられること、副葬された土器が転用枕としたものより、足元に配置したものがより古いことなどからみると、次のように考えられる。

須恵期編年のII期において築造された古墳で、先ずII号人が埋葬され、その後かなりの期間を経て、血液型からみて濃い血縁者であるI号人が、ふたたびこの石棺を開いて埋葬されたものであり、その際に先骨をとり上げておき、I号人を伸展位に安置したのちII号人の遺骨を、その副葬土器も足端に副えて埋納したものと一応は理解することが出来る。

それにしてもII号人骨の内で最も保存のよいはずの大腿骨等が遺存しないことは大きな

疑問点であり、また副葬された土器も新しい段階の須恵器を枕とした1号人埋葬時点すでに追葬を想定しており、のちに他所の古い埋葬遺物を追加して改葬したものかとも考えることが出来るかもしれないが、その場合は、この女性二人の合葬の理由が判然としない。

このように1号墳の被葬者には一般事例と異なる諸点が挙げられるもので、単なる族長クラスとか家族関係のみで説明出来るものではないようだ。

この1号墳は既に墳丘のほとんどが削り失われ、わずかに周溝底が半周程度残存しているのみである。

踏査で2号墳としたのは試掘で確認することが出来なかった。この位置を含む3号墳・4号墳とともに墳丘のほとんどが工事で失われて、前者は直径10mの周溝底のみが、後者は部分的にそれかと思われる落ち込みが認められる。

約90m離れた8号墳はその表土が削られてわずかにマウンドであることが判る程度で、主体部付近に石材は用いていないようだが主体部は残存している可能性がある。

10号墳は破損が著しく、さらにその上に工事盛土によって埋没している。

工事による損傷の及んでいない古墳としては5号墳・6号墳・9号墳・11号墳がある。

5号墳の主体部はトレンチによって木棺直葬かと思われた。その他の古墳については未調査である。

以上のようにほとんどが小円墳で、フラットな尾根上に並ぶ古墳群である。眼下に妻伊川を隔てて代山地区を一望する地点に立地している。

この代山地区は、のちに横田郷の正倉がおかれたところと比定されているところで、郷の中心的な集落となったところである。

この大呂・川向古墳群はその集落発展の過程を知る手がかりとなるものとして、また、近隣地域においても当該期にまで遡る古墳はこれまで知られていないことからも、地域の歴史を解明する上で重要な遺跡であるといえよう。

なお、1号墳の人骨及び入骨付着物の検証については、それぞれ依頼して行った。その報文は別章に収録した。

## 鑑定報告要旨

### 付 I 大呂・川向1号墳人骨付着物の顔料検証

平安博物館 上田健夫

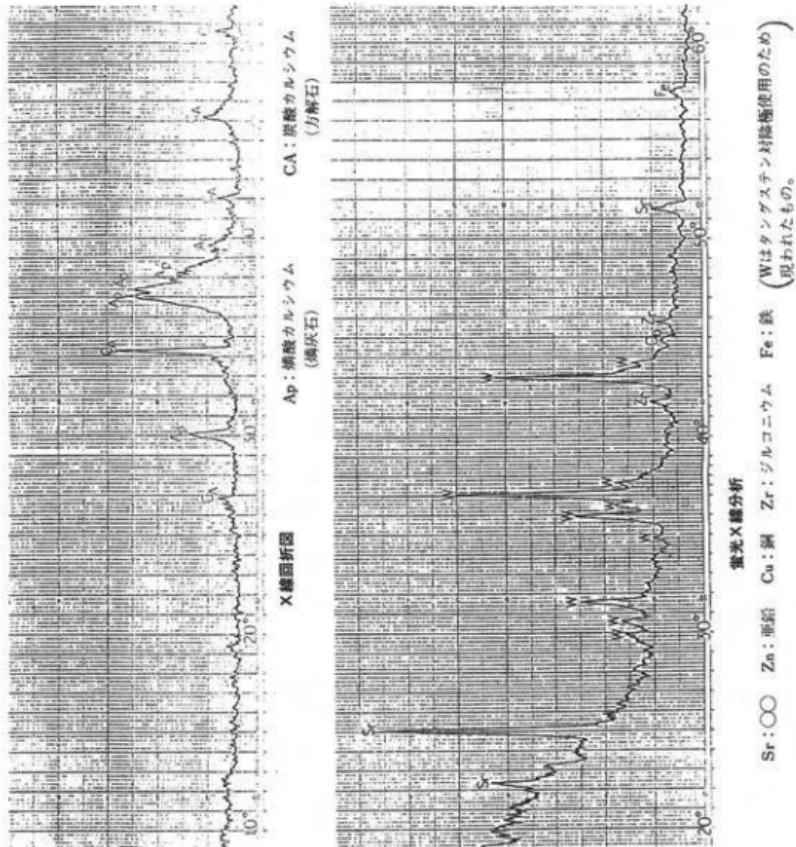
1. 大呂・川向古墳1号墳人骨付着物（淡黒褐色）のX線回折图形では燐灰石（磷酸カルシウムと方解石（炭酸カルシウム）のビークしか現れない。燐灰石は骨の成分で、方解石は燐灰石が風化分解して生成したものと思われる。常に結晶度が悪く、図のようにビークは低く幅広く、また先端が分岐する。  
ところで辰砂（水銀朱）や赤鉄鉱（ペンガラ）のビークは全く現れない。従って骨の表面に附着していた淡黒褐色の物質は非結晶質のものであると思われる。
2. 蛍光X線分析の結果、Fe、Ca、Zn、Zrがわずかに、Srも明らかに認められたが、これらはいずれも土に由来するものと思われる。
3. さらにガスバーナーで加熱すれば淡黒褐色の物質は白色となる。よってこの物質は有機物と考えられる。
4. 以上の結果から有機物と判定する。

試料	所 在 地	内 壁・外壁名	試料の存在状態	剖 面 試 料	檢 査 試 料	檢 査 試 料 特 徵
1	島根県船形多賀横 H町大内	川内古墳、1号墳 箱式石棺	棺内に人骨2体、頭骨に淡黒褐色の赤色顔料附着	以胞衣の塗付 小型灰 リチ	「方入骨」の頭骨を削除 (淡黒褐色の赤色顔料) 頭骨削除	頭骨片とともに附着せる淡黒褐色の赤色顔料質
2 (比較)	島根県人出郡加茂町	川子谷B1号墳 箱式石棺	棺内に人骨2体(1ド)、下位の1体の頭骨に赤色顔料附着	な し	下位人骨の頭骨削除下 赤色灰土	土上の頭骨削除物と赤色顔料との混合物
3 (比較)	島根県人出郡加茂町	神原正面北せき塚群 C10-1号墳 箱式石棺	人骨なし、石室外の墓壇に赤5個と赤色顔料とを埋納したビット	最初3年頃の三角錐 神原館(1枚) 朱塗瓦(大刀)(1枚)、 鉄錠、鉛錠、ノミ、 鏡など	石棺内の赤色灰土:	石棺内の赤色顔料 (出現の量甚少)
4 (比較)	島根県人出郡加茂町	神原神社古墳 箱式木棺	人骨なし、石室外の墓壇に赤5個と赤色顔料とを埋納したビット	土器(朱彩)、 ガラス球(2個)、 管玉(数個)	青塗灰の赤色顔料	小鉢物(種々の鉢物)の混入殆んどなし。
5 (比較)	島根県出雲市 大津町下東原字西谷	西谷丘陵塚 3号塚(第11号) 木棺木漆	墓壇甃一箇に赤色顔料(ひん)い陶器など4cmにも達する)	青塗灰の赤色顔料 (約100個)、	同	同

試料	X線回析による試料分析	波光X線分析による塗装に及ぼす影響										備 考	
		Cr	Mn	Fe	Ni	Cu	Zn	Rb	Sr	Zr	U	V	
1	焼灰石、方解石				1	1		+	+	-			ガラスバーナーで加热すれば 淡黒褐色の物質は白色となる。よってこの物質は有機物と考えられる。
2	石英、斜長石 ハロイサイト、加水ハロイサイト				+	+	+	+	+	+	+	+	有機酸塩に由るもので 該分は赤色顔料に由るもので て認めさせている。無化鉄 又は小鉢化鉄の溶剤に由る ものであろう。
3	石英、斜長石 ハロイサイト、加水ハロイサイト	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	無化鉄または水無化鉄 の溶剤による赤土。
4	珪岩	+		1					+	1	+	+	水銀灰
5	珪岩	+			+	+	+	+	+	+	+	+	水銀灰

符号「+」の個数は、「多い」「少し」「少ない」の並なるやう。

大呂・川向古墳 1号墳人骨付遺物分析



## 付2 大呂・川向古墳1号墳の出土人骨について

鳥取大学医学部法医学教室 井上晃孝

### 1. 概要

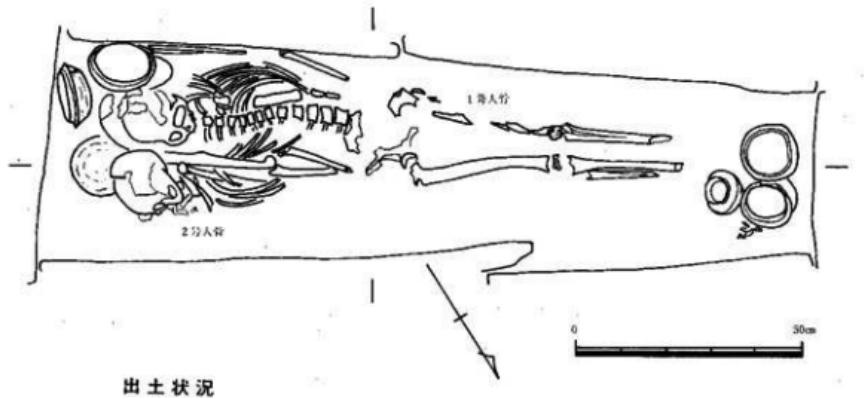
横田町大字大呂字川向の大呂・川向古墳群のうち、1号墳の箱式石棺内には東側を頭位にした人骨が2体埋葬されていた。

左側の被葬者（1号人骨）は主理葬者で左上肢付近に刀子を副葬しており、左側の壁に沿うように仰臥伸展位で埋葬され、ほぼ全身が原理解時のままの位置を示し、二次的移動の痕跡はない。

1号人骨の保存状態は比較的良好のようにみえたが、風化がすんでおり、全般的に脆弱化をきたし、下肢はとくに風化が顕著であった。

右側の被葬者（2号人骨）は1号人骨の右上肢の上に一部重ねたように頭部と上肢骨（上半身骨）のみが集骨状に納骨されていた。

2号人骨は1号人骨に比して風化がさらに著しく、頭部は極めて脆弱化しており、骨の採取時に損壊した。



### 2. 残存骨

1号人骨は仰臥伸展位で埋葬されており、骨はほぼ骨格順に残存していた。

2号人骨の残存骨は、石棺の右側に集骨状に納骨されていた。

1号人骨		2号人骨
頭面～頭頂部にかけて残存 右側頭骨部（乳様突起を含む） 上顎骨は頬骨部から遊離 歯牙は左右1～7まで残存 （左右2～7切歯 * 1は死後遊離 下顎骨は完形 歯牙は左右1～7切歯		前頭部～頭頂部にかけての部位 左右の側頭部と下顎骨 下顎骨は左右の下顎枝を欠く 歯槽に歯牙の釘植はないが歯槽 が深く死後歯牙は遊離した。 (風化が著しく脆弱化しており、 骨の採取時に損壊した。)
椎骨 胸郭 尾骨	頸椎骨 第1～7まで残存 韓突起欠損 胸椎骨 第1～12 * * 腰椎骨 第1～5 * 韓突起一部欠損 仙骨 第1のみ残存 消失	
胸郭	胸骨 胸骨柄・胸骨体ほぼ完存 比較的小さい 鈎状突起 消失 助骨 12対残存するがかなり折損	肋骨は左右とも若干残存するが、 大きく破壊している。
上肢骨	肩甲骨 1対 部位は関節部を中心に上半部のみ 鎖骨 1対 左は両端欠 右完形で最大長12.2cm 上腕骨 1対 左は骨体～遠位部のみ 右はほぼ完形で最大長28.0cm	左のみ 部位は関節部・肩甲線・ 棘下窓の一部と外側線部 1対 左右とも両端欠損骨体部のみ 右のみ 近位部の一部欠く、遠位 部の内・外の上顎部を欠く が、上腕骨滑車が残存 その推定最大長26.1cm
手骨	橈骨 1対 左右とも近位部～骨体中央部まで 尺骨 1対 左は一部のみ 右は近位部～骨体中央部まで 手骨 左右とも若干残存	
下肢骨	寛骨 1対 左は恥骨部（結合面欠落）坐骨一部 右は寛骨臼窓と腸骨棘部 大腿骨 1対 左は骨体部のみで破片状 右は近遠両端の一郎を欠く 膝蓋骨 左右とも消失 脛骨 1対 左右とも（骨体のみ） 腓骨 右のみ 骨体のみ 足骨 左右とも消失	

残存歯牙 (○)：遊離歯牙 △：頚側歯冠部から歯頸部にかけて一部欠損

1号人骨		2号人骨	
△ 7 6 5 4 3 2 1	○ 1 2 3 4 5 6 7		○ 5 ○ 8
△ 7 6 5 4 3 2 1	○ 1 2 3 4 5 6 7		4 ○

### 3. 性別

#### 1) 形態学的特徴

1号人骨	2号人骨
眉間・眉弓の隆起の発達が弱い	眉間・眉弓の隆起の発達が極めて弱い
右乳様突起の隆突は弱い	左右の乳様突起の隆突極めて弱い
胸骨（柄・体）小さく繊細	肩甲骨・上腕骨、その他の骨も細くきしゃや
残存骨全般的に小さくきしゃや	

## 2) 人類学的計測法

1号人骨上腕骨からの性別判別函数法（植原1958）を用いて計測すると次のような。

骨名	左右	判 別 式	判別限界値	資 料 骨	判定
上腕骨	右	$Y = X_1 + 8.7256X_2 + 7.3939X_3$	1189.5143	1140.7634	女性

$X_1$  : 最大長 (280.0mm)     $X_2$  : 最大上頸巾 (推定 : 49.5mm)     $X_3$  : 骨体最小周長 (58.0mm)

判定 :  $+ > \text{判別限界値} > -$

1号人骨の形態学的特徴と性別判別函数法の結果は、いずれも女性と判定しうるので女性と推定する。2号人骨の形態学的特徴は女性骨が具備する条件と一致することから、女性と推定する。

## 4. 年齢

1号人骨の歯牙の萌出は上下顎左右1～7まで萌出、すべて永久歯である。咬耗度は上下顎左右の中切歯のみBrocaの分類では1～2度、その他の歯牙は0～1度にとどまっている。上顎の切歯縫合は左右の外側部は歯着しているが、正中部は歯着なし。以上から年齢は20代後半位と推定する。

2号人骨の残存歯牙はすべて永久歯、第3大臼歯の萌出は17～25歳位といわれ、軽度の咬耗がみられる。下顎の左右の大臼歯部の歯槽部は平坦化しているので、抜歯後かなり年数が経過したものと推定する。残存歯牙の互・隣の咬耗度をみるとBrocaの分類では2～3度に相当し、年齢は壮年～熟年位と推定されるが、詳細は不明である。

## 5. 身長

1号人骨の残存骨のうち完形に近い四肢骨は上腕骨と大腿骨がある。

2号人骨は完形の四肢骨はないが、唯一の四肢骨である左上腕骨が残存しており、参考までに身長を推定している。

	骨名	左右	最 大 長	ビアソン法	安藤 法	藤井 法	工藤 法
1号人骨	上腕骨	右	280.0mm	149.2cm	150.3cm	147.9cm	/
	大腿骨	右	380.0mm	139.5cm	147.5cm	146.2cm	151.0cm
2号人骨	上腕骨	左	261.0mm	143.9cm	143.6cm	143.7cm	/

1号人骨は大腿骨からのビアソン法の値が異常に低いので、一応これを除外して他の方法の値をみると大約近似値がえられ、推定身長は約146～151cm位となる。

2号人骨は大約144cm位と推定される。

## 6. 血液型検査

核 体	未処理血球			酵素処理血球			判定
	抗A	抗B	抗O(H)	抗A	抗B	抗O(H)	
1号人骨歯牙(?)	-	-	-	-	-	+	O型
2号人骨歯牙(?)	-	-	-	-	-	+	O型
対 照	A型	#	-	+	#	-	A型
	B型	-	#	+	-	#	B型
	即知歯牙	O型	-	-	#	-	O型

検体：1号人骨 左上顎第2大臼歯(?)

2号人骨 左上顎第3大臼歯(?)

検査法：抗体解離試験法

未処理血球法：抗A 抗B 抗O(H)

凝集素価256X

酵素処理血球法：抗A 抗B 抗O(H)

凝集素価2,560X

未処理血球法では、本検体のような陳旧資料の場合、血液型物質（抗原）が極めて減弱しているか消失していることがあるので、判定不能であったが、酵素処理血球法を用いると、未処理血球法より10倍の鋭敏性がえられ、かろうじて1・2号人骨ともO型と判定された結果を得た。

## 7. 2体の被葬者の関係

1号人骨：女性 20代後半 O型

2号人骨：女性 壮年～熟年 O型

被葬者同志の関係は極めて親密な間柄が想定され、親子（母親と娘）関係か、あるいは姉妹の関係が思量され、血液型では一応肯定されるが、決定的な要因とはなり難く、今後人類学的見地からさらに検討を加えてみたい。

## 8. 埋葬順序

1号人骨は石棺左側に頭位を東側にして、仰臥伸展位で埋葬され、骨の乱れがなく、二次的移動の形跡は全くない。

2号人骨は石棺右側で頭位を東側にして、1号人骨と平行に、1号人骨の右上肢骨上に一部重なるようにして頭部と上半部の骨が集骨状に納骨しており、明らかに移動の形跡がみられる。

2体の人骨の陳旧度からみて、2号人骨の方が1号人骨と比較してより陳旧であり、風化が著しいことからして、2号人骨の方が先に埋葬された可能性が高い。

2体の人骨はその陳旧度に差があり、供獻された副葬品の須恵器が山本編年の第Ⅱ期と第Ⅲ期であることと、蓋石と側壁との間の目張り粘土の質に差異が認められる（杉原調査員談）ことからして、開封追葬された可能性が極めて高い。

埋葬順序について私案を示すと次の通りである。

## 第1案)

最初に2号人骨が当該石棺に埋葬され、白骨化した段階で1号人骨が埋葬されるに及んで石棺を開封し、とりあえず2号人骨の残存骨をひとまず棺外へ移し、1号人骨を左側の壁面に沿って仰臥伸展位で埋葬した〔1体だけを埋葬する場合、棺の中央に遺体を安置するのが通例であるのに、意識的に壁際に沿って埋葬してあり、この時点で明らかに2号人骨の埋葬（納骨）を意図した疑いがある〕後、1号人骨の右上肢上に一部重なるようにして、2号人骨の残存骨を集骨状に納骨した。

しかし疑問点が残る。それは2号人骨の集骨状の中に比較的消失しやすい肋骨が残存するのに、何故太く遺存性の高い大脛骨・胫骨・骨盤・右上腕骨がないのかという点である。  
第2案)

先に2号人骨が他の場所で埋葬され、すでに白骨化しており、次に1号人骨が当該石棺に埋葬された（その時すでに2号人骨の納骨を意図して、左壁間に沿って埋葬した）後、改めて開封され、追葬の形で2号人骨（主に頭部を含む上半身骨のみ）を集骨状に分身納骨された。

埋葬順序についても、なお疑問が残るのでさらに検討したい。

## 9.まとめ

大呂・川向古墳1号墳の箱式石棺内には2体が埋葬されていた。

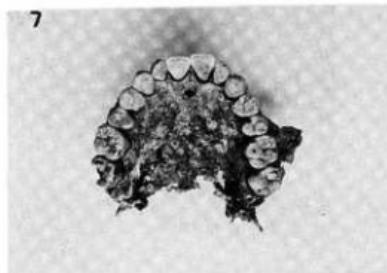
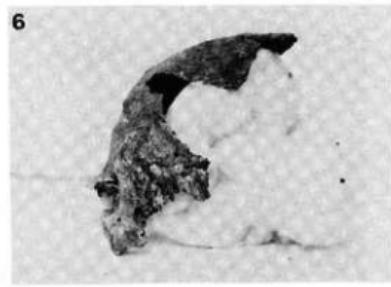
1号人骨は左側で東側を頭位にして仰臥伸展位で埋葬され、二次的移動はない。本屍骨は女性、年齢は20代後半、推定身長は約146～151cm、血液型はO型である。

2号人骨は右側で東側を頭位にして、1号人骨上に一部重なるように、集骨状に追葬されていた。本屍骨は女性、年齢は壮年～熟年、推定身長は約144cm位、血液型はO型である。

2体の被葬者の関係は極めて親密な間柄が推察され、親子（母娘）か姉妹の関係が想量されるが、現在のところ詳細は不明である。

## 文献

- 1) 安藤守広：日本人（成年）四肢骨の計測について 国家医誌、434、101-120：1923
- 2) 藤井 明：四肢長骨の長さと身長との関係について 駒澤大学体育学部紀要 3、49-61、 1960
- 3) 岸原和郎：判別函数による日本人長骨の性別判定法 人類学誌、66、187-196、1958
- 4) 工藤敏行：赤石英：臨床医のための法医学 PP220-221、南江堂、東京（1967）より引用
- 5) Pearson,K : Mathematical contributions to the theory of evolution,  
V. On the reconstruction of the stature of prehistoric races. Phil  
Trans. Roy. Soc. London, ser. A. 192, 169-244, 1899



1. 箱式石棺内の人骨 (左側: 1号人骨, 右側: 2号人骨)
2. \* (上半部拡大)
3. 1号人骨 前頭骨
4. \* 右側頭骨
5. \* 右側面 (前頭~頭頂部)
6. \* 左側面 (\*)
7. \* 上顎骨

8



9



10



11



12



13



14

上顎												
右						左						
6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16

下顎												
右						左						
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39

8. 1号人骨 下顎骨

9. 2号人骨 前額骨

10. ♀ 左側頭骨

11. ♀ 右側面 (前額~頭頂部)

12. ♀ 左側面 ( ♀ )

13. ♀ 下顎骨

14. ♀ 残存歯牙



3

4



1. 1～4号墳全景（5号墳頂より）

2. 1号墳発見時状況

3. 5号墳遠景

4. 7・8号墳遠景

5. 1号墳蓋石除去

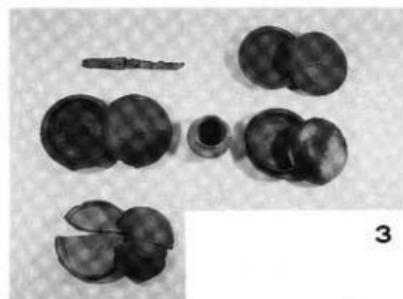
6. ノ 主体部全容



1



2



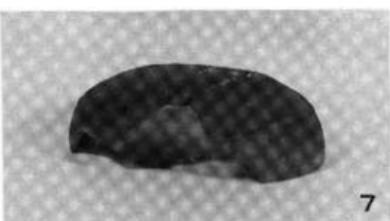
3



6



4



7



5



8

1. 1号墳 副葬状況

2. ✕ ✕

3. 1号墳 出土遺物

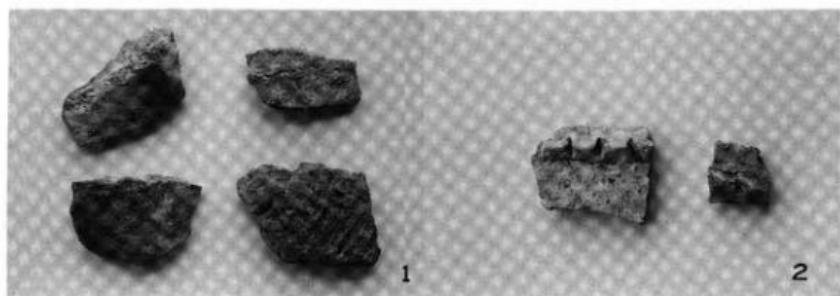
4. ✕ ✕ (図5-1)

5. 1号墳 出土遺物 (図5-4)

6. ✕ ✕ (図5-6)

7. ✕ ✕ (図5-10)

8. ✕ ✕ (図5-9)



1·2. 繩文式土器 3. 弥生式土器 4. 石鏟  
5. 土師器 (5号墳周溝出土)

白石迫古墳

# 白石迫古墳の調査

## 調査の概要

遺跡名：白石迫古墳

遺跡の所在地：島根県仁多郡横田町大字稻原字白石迫1948番地(山林)地権者藤原武之助

調査主体者：横田町教育委員会 教育長 糸原正徳 事務局 三成輝男

調査担当者：島根県埋蔵文化財調査員 杉原清一

調査期間：昭和52年6月1日～6月6日

調査作業者：永浜順子 松浦 昇 小川昭男 加本楠男(町内各小中学校教諭)

佐世川徳雄 足立文人(横田史談会々員) 小川謙美(学生)

## 1. はじめに

白石迫古墳は、付近の住民の間では古くからその存在が知られていた横穴式石室の古墳であった。この古墳の発見は明治以前ともいわれ、封土の流亡と石室の石材を採掘をしたため、主体部構造は大破した状態であった。

横田町においては国営農地開発事業が計画推進されており、昭和51年度からその造成工事が開始された。白石迫古墳もその施工区域内に所在し、昭和52年度の工事によって消滅することとなった。このため横田町教育委員会は記録保存のため発掘調査を行うこととした。

なお、この調査作業には町内各小中学校の教員や、横田史談会々員の有志が参加して、6日間を費やして行った。

## 2. 古墳の立地と環境

この古墳は横田町の中心部から南へ約2km、大字下横田との境に近く、南から北へ低く延びる支丘陵の先端近い南西斜面上方の標高395m地点に営まれている。谷間の水田からの比高は約20mである。地形をみると、なだらかな稜線上にわずかに高まるところの丘腹でわずかに瘤状となる地形を選んでいる。

古墳からの視界は狭く西方のみで、下横田へ越す込堂峠(こんだわ)を望む。

付近の遺跡についてみると、北東へ約1kmの下流部の小丘上に手場古墳が在る。また北約1kmの山腹には古崖上古墳があり、いずれも古くから知られている。これらは横穴式石室を主体とするもので、前者は特に小形の石室である。横穴墓は横田盆地の北側と西側の山陵に多数知られていて、大字下横田字川西地区の大堀横穴群(10)はそのうちでも規模

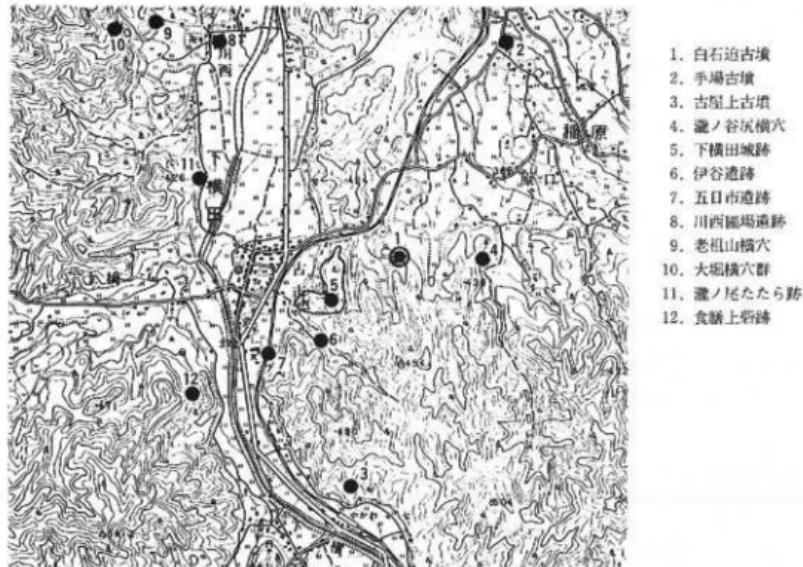


図1. 位置図

の大きいものである。このほか横田盆地周辺には箱式石棺を主体とする数基の古墳が知られているが、地図に示した古墳・横穴はいずれも後期～末期に属する。なお横穴式石室の古墳は横田盆地付近には希薄であり、ここに示した3古墳が主要なものである。

このほかの遺跡についてみると、大字下横田の中心地古市地区では、八川小学校々地～鉄道敷地には五日市遺跡があり、弥生後期以降各期の土器等が出土し、特に奈良・平安期の遺物が著しく、吹子の羽口など鐵精錬の遺物も含む。またその後背丘陵上には中世の城跡があり、北端は峠道でその傍の込堂峠古墓群は今日に至る墓地となっている。

### 3. 遺構

この古墳の付近の自然土層は、風化花崗岩（真砂）を母材心土とし、その上に根群の密な表土が20～30cmある2層の層序で、横田町内等に最も普通にみられる林地の土層である。

この古墳は、丘腹のわずかに瘤状となる地形のところに地山深く掘り込み、花崗岩の大型板状削石を用いて石室を築きながら後背周溝部を堀削し、その上を盛り上げて円墳としたものである。

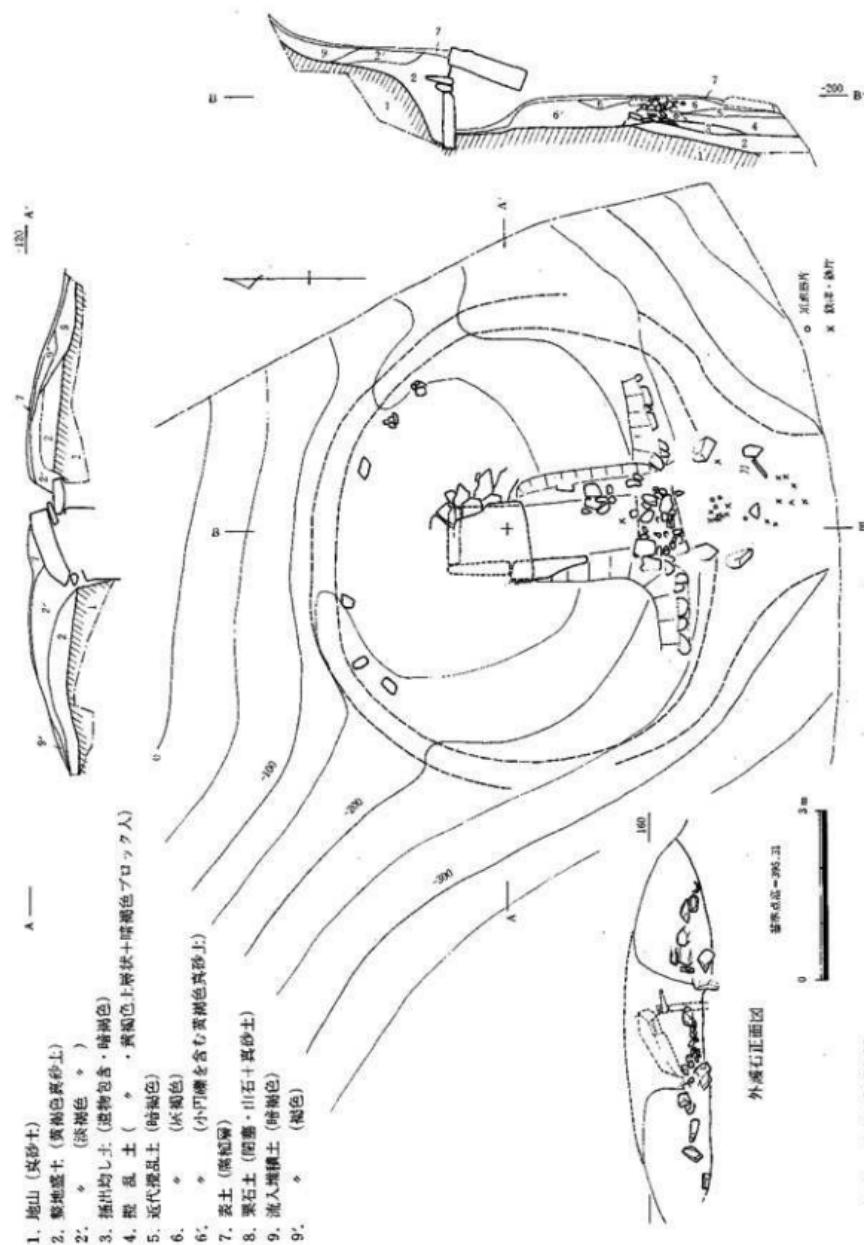


图2. 古墳実測図

## A) 墳丘について

墳丘は頂部から前方（南）が破損しているほかは遺構がよく残っていた。

墳丘規模は南北6.5m、東西7.8m、前庭からの高さ（現存高）1.8mの円形で、周溝は0.5～0.6m幅で北後背から東西へ半周するものであり、後方が狭くて高く、東西両側に下りながらやや広くなり、前方の広い庭面へと続く。

石室前の築道部前端から左右へ墳丘被部を保護する外護石の石積みが行われており、その前方にはほぼ三角形をなす庭面が約2.5m残存しているが、前端は工事で削られて崖となっている。外護石は石室入口両側各2mほどの間に造られており、石室に近いところは2～3段に両側へ行くと1段のみとし、盛土墳丘の上留めとしているものである。

墳丘後半部分の肩部分には、20～30cmの板状割石を0.7～1.1m間隔に点々と貼りめぐらせていました。この貼石は墳丘前方へも行われていたか否かは不明である。また墳頂部も大きく破損し大井石が露呈しているため墳丘表面の状況は不明である。

## B) 石室について

石室規模は内法で奥幅1.0m 高さ1.1m 長さ2.95m、奥門部幅0.88m（高さは不明）で、袖無し型のプランである。

奥壁は1枚石を立てて天井石との間を板状割石片を小口積みで詰めている。側壁は西側の奥は2段に、東側は1枚石を立てて用い、大井石との間は同様に小割石を詰めている。

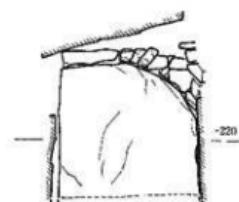
側壁石は西側では奥から1.0m次いで1.2mの長さで下段の立石が残っており、あと築道入口部までの約1mについては1枚の石であったものが取り去られている。東側では奥部1mの1枚のみ残っており、あと入口まで約2.2m間は2枚の石材が西側と同様に取り去られて現存しない。

このように玄室両側壁はいずれも長さ1～1.2mの板状石を各3枚組みとしていたものである。

大井石は最奥のものは幅1.1m、長さ1.4m、厚さ30～40cmを測る。また前庭に放置された板石は、幅0.9m、長さ0.9m、厚さ20～30cmで奥のものより薄く、玄室前方部分の天井石とみられる。中間部の天井石は失われているが1枚であったと思われる。

後道入口の閉塞は割石屑を積み上げ土砂で詰めたもので、擾乱土によって被われていた。玄室内には厚さ約60cmの崩落土が擾乱されて堆積しており前庭部にまで及んでいた。石室内では直径3～5cmの川石（円礫）が多数混入しており、前庭部では見当らないことから礫床であったと思われる。また閉塞積みの内外被部では小鉄洋片や鉄錆塊が10数点検出された。これは閉塞に用いた土砂に混っていたものと思われる。

X 距離  
 △ 鉛片・剣  
 ◆ スズ斧  
 基準点高-395.31



1. 地山 (真砂土)
2. 整地盛土 (黄褐色真砂土)
3. 挿出均じ土 (遺物包含・暗褐色)
4. 掘乱土 (遺物包含・  
黄褐色土層状+暗褐色ブロック入り)
5. 近代擬乱土 (暗褐色)
6. " (灰褐色)
7. 表土 (高植解)
8. 砂石土 (閉塞・山石+真砂土)

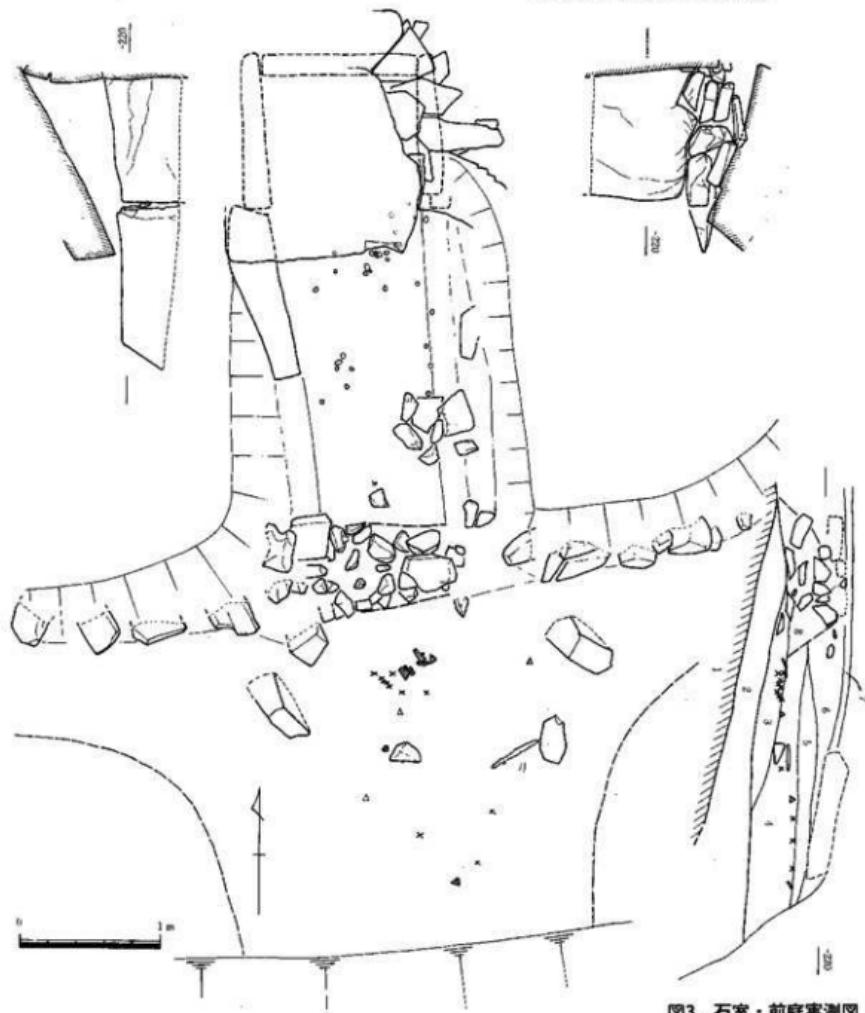


図3. 石室・前庭実測図

前庭面には削平面上に厚さ15~30cm固く結った黄褐色土層があり、この中から須恵器片や鹽片、直刀残欠や小鉄器等を検出した。

これらの状況から玄室内の遺物を含む堆積土を前庭までかき出して均し、その後川礫を敷いて追葬したものではないかと想像した。

#### 4. 遺物

##### A) 直刀残欠 (1・3)

刃部半ばで折れて先端部はない。形状は平造り・平棟で、幾分内反り気味である。茎端も折れて失われているが、末端を薄く尖らせるものとみられる。目貫孔は見当らない。刃区は斜めに鋸き取ってあり、棟区も急斜に切り込んである。また区に近く幅3.1cmほどの鉄製柄帶金具が施されている。柄・鞘等の木製部分はすべて失われている。

計測値は次の通りである。

残存全長 39.5cm (刃部長 29.3cm 茎部長 10.2cm)

刃区幅 : 幅3.3cm 厚さ0.9cm 茎区部 : 幅2.5cm 厚さ0.8cm

茎折端部 : 幅1.5cm 厚さ0.3cm 柄帶金具 : 幅3.1cm 厚さ0.2cm

外長径 : 3.3cm 外短径 : 2.2cm

刀身の銹化による剝離状況から3層に合せたものとみられ、後世の叩伏せ鍛えに類似する作刀方法であったと推察される。

また柄は柄木に打ち込んで両区で喰い止め、柄縁を帶金具で締めていたものとみられる。

##### B) 袋状金具 (2)

鉄製袋状の金具で、鉄材の長さは0.2~0.4cm、幅5.2cm、残存長3.0cm、厚さ2.0cmを測

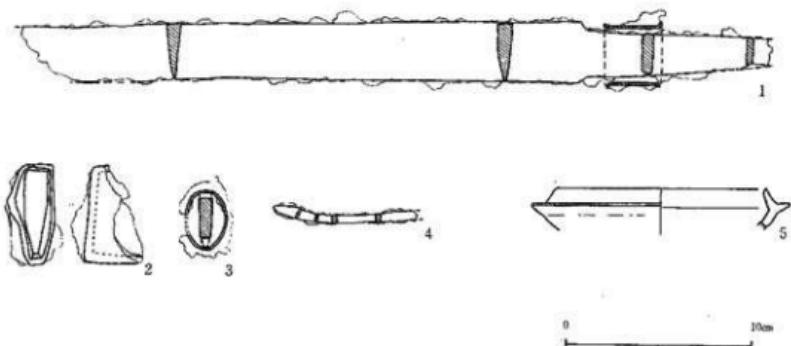


図4. 遺物図

る。形状から類推すると大刀の鞘端に嵌め込んだ鞘尻金具（鎧）ではなかろうか。

C) 棒状鉄器 (4)

5×4mm角柱状の一端が偏平となり先端は尖る。現存長7.4cmで全体がやや出っている。本来真直ぐであるとすると柳刃の鎌と考えられる。

D) 鉄滓 (1個)

3×4×5cmほどのやや長方形。外見は錫化しているが、破面は多孔質でわずかに木炭片を噛み込んでいる。また結晶質の部分もある。製錫滓であろうか。

E) 鎏小塊 (15個)

1～3cmの不整形のもので、このうち数個は鉄滓かとも思われるが、直刀破片等の錫化したものもあるかと思われる。

F) 須恵器 (破片) (5)

环身の小破片で、受け部の立ち上りを含むもの1片のほかはやや大型の器の胴部破片10個である。

环身の受け部立ち上りは内傾し、器径は14cm前後と推定される。山陵編年のIV期に入るものであろう。

胴部破片は接合すると3つの部分となる。表面はやや細かい叩き目の上に同心円の搔き目が施され、内面は不揃いな円形叩目文である。厚さは0.7～1.2cmで一部焼成の歪みもある。提瓶の胴部か或は類似する器種のものか明確でない。

## 5.まとめ

この古墳は丘陵尾根から少し下った斜面上方に設けた約8×7mの円墳で、袖無型横穴式石室を地山を深く掘り込んで構築している。奥壁・奥両側壁は堀り方に立てかけるよう据え付ける。そのため奥の天井石は堀り方に石蓋をしたような状態である。後方の崩溝を掘り上げて墳丘頂部を盛り土しているが、その土量は少量ですむことになる。このような構築手法は山間地帯にはかなり普通に存在すると考えられる。<sup>11)</sup>

石室は奥幅1.0m高さ1.0m全長3m弱で、入口部には漸次狭くなり、門柱石等は認められない。羨道の閉塞はグリ石積みで、床面には川石礫を敷いていたものとみられる。造り出し状の前庭には追葬の際に玄室内から堆土したとみられる土層があり若干の遺物片が採取された。

特筆すべき点は、墳丘の肩部を列石状の貼石で飾ること、墳丘前端の裾部である渢門両脇部分に墳丘盛土の崩壊防止のための外護石列が設けられていることである。外護石列をもつものや肩部に装飾列石を行ったものの事例は、島根県内においては知られていない。

やや近い事例として東広島市の原田岡山第1号古墳の外護列石の場合が挙げられよう。但しこの場合は盛土による墳丘を全周するもので2段になるものようであり、本例とはいさきか趣を異にするものである。<sup>27)</sup>

この古墳は出土土器片や古墳主体の様相から7世紀前半代の時期と考えられる。

当地方ではこの頃から鉄製品の副葬が顕著となることから地方での製鉄が想定され、出土した直刀は甲冑様の鍛造品であり、鎧金具とみられるものや鉄洋等も検出されたことから、この古墳の主は製鉄に関与した人物かとも想像される。

#### 参考文献

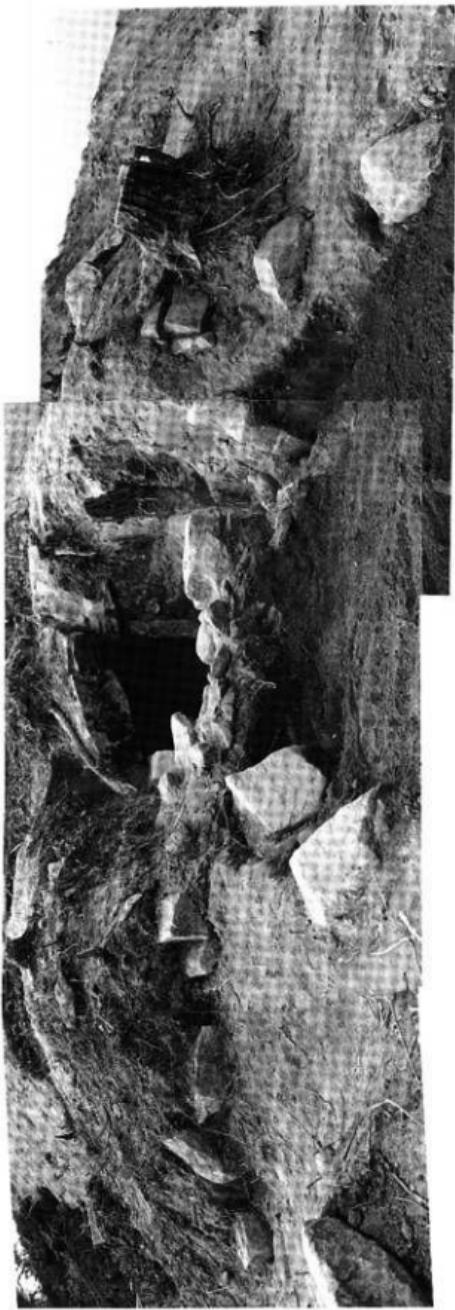
- 1) 門脇俊彦：「邑智郡石見町削山古墳」『季刊文化財』11号 島根県文化財愛護協会（昭和45年）
- 2) 岩井重道：「外護列石をもつ古墳－原田岡山第1・3号古墳」『ひろしまの遺跡』38号（平成元年）



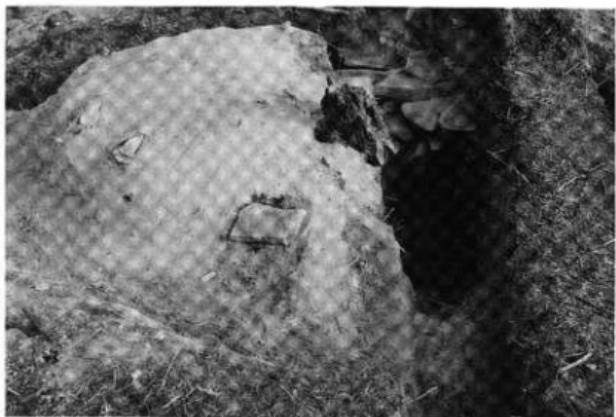
古 墳 遠 景 (南から)



墳 丘 全 景 (北から)



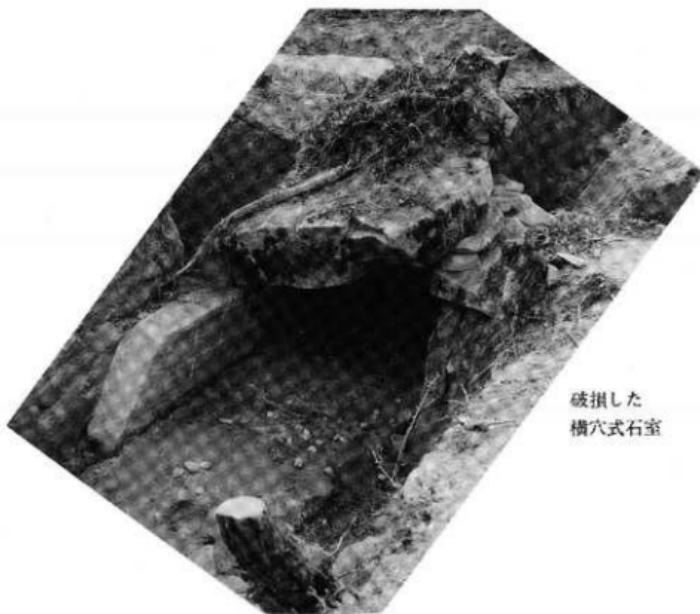
外護石列と前庭部



墳丘肩部  
の貼石

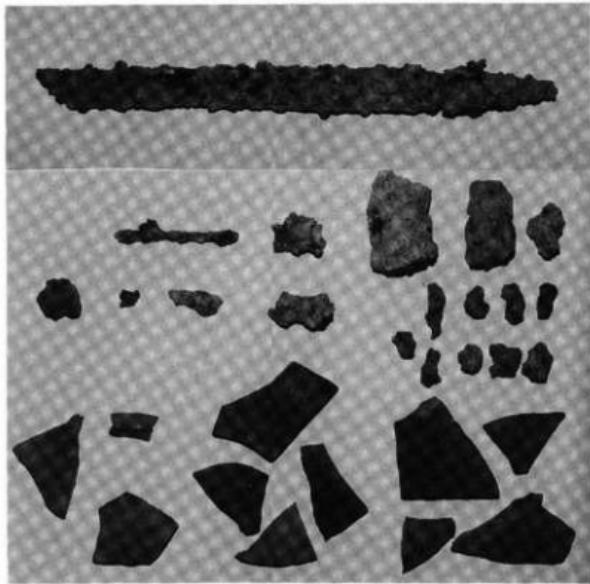


作業風景



破損した  
横穴式石室

直刀



発掘調査報告書

大呂・川向古墳群  
白石追古墳

1993年9月

発行 横田町教育委員会  
島根県仁多郡横田町大字横山1037

印刷 行木水印刷  
島根県白石郡三刀屋町1835